

元朝曙光
未明歩登
東天微光
高尾山頂
迎拜曙光

厚木市 荒井 一雄
むらさきが
赤むらさきに だいだいと
ひんがしの空の色かはりゆく
未明から歩み登れば、
東の空に微かな
光が見ゆ・・・
高尾山頂にて、
曙光(初日の出)を
迎拜す・・・

千両か萬兩か鳥のたまもの
庭に白い花水木が咲き、梅の花が散りし後
の寂寥を楽しんでいたが、いつしか枯れた。
暫その儘にしておくと、小鳥らは時折、枯れ
木に群れて羽を休め囀っていた。
年末、庭の掃除に除去したら、根元に千兩
か萬兩か、高さ五十糎程の濃紺な葉陰に、深
紅の赤い実が照り、色の乏しい庭に紅を点し
ている。鳥の恵みの賜物であろう。大事にし
たい。

(高尾山健康登山の会々長)

折り折りの記(77)

波多野 重雄

千両か萬兩か鳥のたまもの

では、どのようにすれば「貧窮の苦」から抜け出せるのでしょうか。いつもとも知らぬ宝船の来訪を待つしかないのでしょうか。
平安時代のお話。金峰山の齋院という修験道の修行場に、良算という聖人がいました。聖人は以前から「この身は水の泡のようなもので命は朝露のようなもの。だからこの世のことは考えずに、後の世のために勤めよう」と思い、故郷を捨てて金峰山に参詣します。出家してからは、草庵を結んで里に出ず、長く穀物と塩を断ち、山菜や木の葉を日常の食事としながら日夜『法華経』を読んで修行に明け暮れます。

修行のはじめの頃は、鬼神が邪魔をしに来ましたが、聖人が一心にお経を唱えていると、やがて鬼神も敬うようになり、木の実などを持って来るようになりました。
聖人は、山の人が食べ物を与えてくれても喜ば

ず、人がやって来て話しかけても答えようとせず、ただひたすらにお経を読んでいるだけでした。それは、眠っているときも、眠りながら読経する声が聞こえるほどでした。
さて、いよいよ臨終の時のこと、聖人は顔色が良く、笑みを湛えていました。それを見た人が尋ねます。「最期の時に、なぜ嬉しそうなのですか」と。すると聖人は「長年貧乏だったが、遂に富み栄えることができたのだよ」と答えます。不思議に思い、「それはどういうことですか」とさらに尋ねてみると、聖人は静かに語りました。「煩惱に汚れた体を捨てて、清浄な身を得ることができたのだよ」と。そう答えると、聖人はそのまま亡くなったのでした。
『今昔物語集』
仏道修行の乏しいことを「貧道」と言います。ここに登場する聖人は、仏様といつも一緒にいることで、「貧しい道」か

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(43)

年暮れぬ

春来べしとは

思ひ寝に

まさしく見えて
かなふ初夢

(西行『山家集』)

(年)も暮れた。いよいよ春が来るだろうと思つて眠ると、まさしく目の前に春が広がっている。初夢が叶ったよ

皆さんは、今年どのような「初夢」をご覧になりましたか。古くは節分の夜(立春の朝)の夢を初夢と言いました。それはやがて、大晦日や元旦の夜へと移り、いつしか正月二日の夜の夢と定まつていったようです。一説では、大晦日は誰も眠る者がおらず、元旦は逆に皆ぐっすり眠つてしまつて夢を見ないからとか私も幼い頃は、二日の夜に一年の幸せを求めて、

「富士、二鷹、三茄子」と目出度い言葉を呪文のように繰り返しながら横になると、何かを見たような気がするのですが、それは時間とともに薄れゆき、いつも淡い記憶が残されていただけだったように思えます。

はじめに挙げた「年暮れぬ」の歌は、平安時代の終わりごろに生きた西行法師(一一八〇―一一九〇)が詠つたものです。新春を迎えるに当たつて西行はどのような光景を思い描きながら眠りに就いたのでしょうか。穏やかに夜が明け行くように、思い寝覚めの西行には、麗らかな春の光が射し込んでいたのかもしれない。この『山家集』の冒頭を飾る一首は、「初夢」という言葉の初出の歌と

しても注目されます。室町時代になると、「良船」の絵を枕の下に敷いて寝るという風習が始まりました。米俵や宝物を積んだ宝船には七福神が描かれ、船の帆には悪夢を食べるといふ想像上の動物「猯」の文字が記されました。また宝船には

なまのりふねの
をどのよきかな
なみなめさめ

という「回文歌」も添えられました。回文歌とは「たけやぶやけた」のように、上から読んで下から読んでも同じ音になっている歌のことです。漢字を当ててみると、

遠の眠りの
皆目覚め
波乗り船の
音の良きかな

となるでしょう。「遠の眠り」とは「深い眠り」を意味します。宝船の到来を知る心地良い波の音



富士山の初夢を見ると、縁起が良いとされています。(高尾山頂より)

に、長かった冬の夜から春へと明け行く様子が詠われているのでしょうか。ちなみに仏教では、人間が欲望に迷っている姿を「長夜の眠り」と喻えます。金銀財宝とまではいかなくても、欲しいものが手に入らないのは辛いものです。仮に自分のものにできたとしても、次から次へと新たな欲が湧き起つて、尽きることはありませぬ。

「求不得苦」という仏教語があります。「求めず、思うように得られない苦しみ」は、数ある苦の中でも耐え難いものと言われ、欲望の炎が燃え盛ることは、「貧窮」(貧しくて生活に苦しむこと)と同じ状態であると説いています。